

## はじめに

高橋秀寿

今回のテーマは「地域からの戦後史再考」ですが、とくに「福島」の問題を取り上げました。その理由は言うまでもないでしょう。戦後66年目に起きた東日本大震災と福島原発の事故は、戦後がいったい何であったのかを、私たちにまじまじと見せつけることになったからです。もちろん、この見せつけたものが何であり、それはどのように解釈されるべきであるのか、それぞれの体験や立場によって異なるでしょう。そこで、連続講座の第四講座を始めるにあたってその主旨を説明し、登壇者を紹介するために、個人的な体験を若干述べさせていただくことをお許しください。

私は高校を出るまで福島県に近い宮城県南部に住んでおり、いまは母親が一人暮らししている実家も東日本大震災で被災し、家屋の一部を失いました。阿武隈川によって創り出された盆地に位置していたため、実家が津波の被害を受けることはありませんでしたが、震災発生から一週間ほど母親とは連絡が取れず、兄が日本海側からガソリンを積んだ車でその被災地に入り、母親を一時退避させました。その後、私は何度か帰郷しましたが、実家のまわりは居住不可能となった家屋が取り壊され、私が生まれ育った町の商店街は歯が抜けたような姿になり果てていました。しかし、たまたま小さな居酒屋に入ってみると、けっこうな賑わいを見せていたのです。聞いてみると、復興予算という公共事業の資金がついて、大資本が入り込み、地域外から来た土木作業者が毎晩のように飲んでいるからだといいます。しかし半年後には作業が終了し、実家のある田舎町からは資本と同時に気前のよかった労働者も消えてしまいました。結局、残されたのは、インフラは復元されたけれども、高濃度の放射線が降り注いだ歯抜けの町並み、そしてシャッター街となった旧商店街と高齢者の姿が目立つまばらな住宅街です。かつては町を取り囲むように広がっていた田んぼをつぶして建てられたセブンアンドアイ・ホールディングス系の巨大なショッピングセンターとその駐車場だけが、にぎわいを見せる田舎町が私の故郷となってしまいました。かつては米どころとして都会への食料供給地として少しは栄えた東北のこの田舎町は、大資本と国家にとって有用性がある限りで生き残りを許されていましたが、いまやその価値を失って過疎化の道を歩む「棄民」ならぬ、「棄地域」になってしまったのです。その歩みは震災前にすでに始まっていましたが、震災はその背中を激しく押し飛ばすことになりました。

立ち入り禁止となった福島原発周辺の町並みをテレビで見たときに、私はその姿が故郷に姿にあまりにも似ていて驚いてしまいました。それは、食料と電力という違いはありながらも、象徴的な意味での「東京」への原動力の供給源として、いわば植民地としての役割を担い、利益も享受することができたが、いまや資本と国家が「東京オリンピック」に資金と関心を注いで行く中で、価値を見出されずに見捨てられていく地域の姿です。つまり、「福島」の問題は原

発事故とその処理の問題だけで済ましてはならない、戦後の政治・経済・社会構造そのものに関わっていると言えるでしょう。

しかし、「がんばろう！ 日本」の掛け声のもとで推し進められたことは、戦後のこのような構造的な問題の再検討ではなく、「復興」という名の現状復帰でした。「除染」と避難住民の帰宅が「復興」の目的とされ、オリンピック開催のために「福島」の安全が国際的にアピールされ、一時停止された原発は再稼働をめざし、この種の「公共事業」に依存する経済・社会構造は温存されています。東日本大震災はその試練の「克服」のサクセス・ストーリーに解消されつつあります。「戦後レジームからの脱却」を声高に訴えていた政治家をふたたびトップに据えた現政権が震災後に行っていることは、沖縄を犠牲とする対米従属の安全保障政策と同様に、「戦後レジーム」の継続にほかなりません。その意味で私たちは、戦後70年を日本全体の物語として語るなかで合格点を与えたり、糾弾したりするのではなく、いまこそ戦後史を地域の視点から根源的に再考することが求められているといえましょう。

今回、報告者としてご登壇していただける中嶋久人さんは、『戦後史のなかの福島原発 開発政策と地域社会』という著作を昨年上梓されておりますが、中嶋さんをお呼びしましたのも、いま述べたような関心、またこの連続講座のテーマにとってもうってつけの研究者であると確信したからです。もちろん地域の問題は東北・福島に限ることはありません。取り上げるべき地域は数多くあるのですが、この講座の短い時間の中でそのすべてを扱うことは不可能であり、中嶋さんの報告にコメントという形で他の地域のことにも触れることにいたしました。そこで、コメンテーターとして医師の山田真さん、大阪大学の野野光明さんにお越しいただきました。山田さんは本業を休んで、東京からお越しいただいたということで、たいへん恐縮しております。山田さんはすでに多くのご著作を公表されていますが、昨年には『水俣から福島へ』を出版され、小児科の立場から森永ヒ素ミルク事件、水俣問題、原水爆実験といったこれまで実践的にも取り組んでこられた問題を論じながら、福島原発事故の問題を小児科の立場から鋭く糾弾しております。戦後のメインストリームにおいて踏み潰された地域や末端の人々に医師として視点を当て、戦後体制が引き起こした問題に取り組んできたとも言える山田さんには、アカデミックな形式にとらわれることなくご自由にご発言いただきたいと思っております。また、沖縄が戦後史を再考する際にもっとも問題となる地域であることはいまでもありません。本来なら、沖縄に関する戦後史がこの連続講座で独自に設けられるべきだったといえます。その欠点を補っていただくために、大野さんにご登壇いただくことになりました。大野さんは、2014年に『沖縄闘争の時代 1960/70』を出版されていますが、この連続講座のきっかけとなった平凡社から出版された『戦後史再考』を西川長夫さん、番匠健一さんとともに編集しております。その意味で沖縄の専門家であると同時に、これまでの国際言語文化研究所が取り組んできた議論を踏まえて、コメントしていただけたらと思っています。